

四旬節第1主日 マタイ4:1~11

朗読された福音箇所少し前（マタイ福音書3章の終わり）では天の父から「これは私の愛する子、私の心に適う者」という声を聞いています。父なる神様から素晴らしい愛を受けたのだから、すぐに人々に福音宣教に出かけてもいいように思います。けれどもイエス様は誘惑を受けられます。

「霊(聖霊)に導かれて」とあるので、たまたま運が悪くという訳ではありません。くぐらなければいけない誘惑でした。どういうことでしょうか？ 実は、イエス様は荒野の他にもう一度誘惑を受けています。

「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」(ルカ23:36) この箇所は、今日の朗読箇所と重なります。どちらも「メシアとしての能力を自分のために用いよ」と誘惑されています。この誘惑の背後には、旧約を通して養われた「権力を持つ神」のイメージがあります。「もし、おまえがユダヤ人の王ならば、自分を救ってみろ。十字架から降りてみる。」兵士や群衆は「強い神、支配する神を見せてくれ!」と期待したでしょう。相手の言いなりになって十字架から下りれば、皆がイエス様を信じるでしょう。けれどもそうはしませんでした。期待通りにしてしまえば、死を受け入れるほど人を愛する神の姿は伝えられません。強い神、成功する神の姿なら見せられるでしょう。けれども、仕える神、自分の命まで与える神、自分を無にする神の姿を見せられません。この“仕える神の姿”を示すためにイエスは来られました。荒野の誘惑は、十字架上で受ける誘惑の序曲です。

では、荒野での誘惑はどのようなものだったのでしょうか？

最初の誘惑「パン」は、物質的なもの、お金、所有欲の代表です。わたしたちの心の中に神様の愛がなければ、愛でないもので心を埋めようとします。食べ物、ショッピング、娯楽などで、愛が足りない部分を穴埋めしようとします。信仰よりも、目で見えるもの、数えられるもの、蓄えられるもの、を優先してしまいます。「信仰よりも年金が頼りになる」という話が冗談ではなくなってしまう。イエス様は「神様から出る一つ一つのことばで生きていける」と誘惑を退けます。

2番目の誘惑は特別な能力です。神殿の屋根から飛び降りたら、人々はアッと驚くでしょう。旧約の強い神を示すことはできます。けれども、父なる神様は、別のことを息子のイエス様に託しています。超人的な能力で人目を引くのではなく、仕える神の姿を示そうと考えています。特別な能力は、神の計画を邪魔するので退けました。

3番目の誘惑は、権力や富、この世の全てです。“世界を治める王”のイメージで、まさに旧約の神の姿です。けれども、イエス様は違う神様を示すために宣教しようとしています。へりくだって人に仕えるためです。3つの誘惑を退けて、宣教の目的が確認できました。

では、イエス様が荒野で受けた誘惑は私たちにとってどのような意味があるのでしょうか？ もので気持ちを紛らすこと、地位を使って人を従わせる便利さを放棄することです。人を動かすよりも自分が動く。仕える者として働く。イエス様は特別扱いを避けました。私たちと同じ姿になって「仕える神様」を見せてくれました。そのことを心に刻みましょう。

ミサの後の四旬節黙想会では「パウロの回心」を祈ります。パウロもいきなりイエス様の姿に近

づけた訳ではありません。苦難や孤独、大切な人との別れ・・・試練を通して回心を深めていきました。私たちも、それぞれが回心を深められるよう願って黙想会に与りましょう。